第２部パネル　分科会 14 新規

これからの20年、日本は様々な冷たさを克服して、あたたかい人間開花社会をつくることができるか

提言

対話による相互承認と自己決定ができる社会にするために、労働者協同組合のような仕組みがあり、当事者になる楽しさが感じられるコミュニティの場を増やそう。

登壇者

【進行役】
堀田　聰子氏　慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授
稲葉　ゆり子氏　たすけあい遠州代表、高南の居場所あえるもん代表
田中　羊子氏　日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会センター事業団理事長
牧野　篤氏　東京大学大学院教育学研究科教授
柳澤　大輔氏　面白法人カヤック代表取締役ＣＥＯ

■ **寄せられた声から**

- 堀田先生のパネリストの特徴を上手に引き出す名司会のお陰で、人がネガティブになりがちな最近の世相を克服するヒントが、次から次に展開されて非常に良かった。
- ４名のパネリストの話は違った視点からの話であったが、それぞれ根本には「つながり」「変化」という共通のキーワードがあり、そのキーワードを活かすことで、人間が様々な環境でどう開花するか等について学ぶことができた。
- それぞれのお立場からのこれから目指すべき社会観が少しわかった気がします。人間開花社会、良い言葉だと思いました。定着するように願っています。私も取り組みます。

議事要旨　堀田 聰子氏

分科会１４は、地域共生社会をつくるというサミット全体の大きなテーマのもと、その際に重視すべき理念として、ひとが持つ多彩な資質・才能をのばし、開花させ、それぞれの能力を社会貢献に向けることにより、文化・社会・経済にわたる多面的発展を遂げることを目標とする「人間開花社会」に焦点をあて、これを手がかりに議論を深めるために東京大会で新たに設置された。

静岡県袋井市で長年にわたってたすけあい活動や居場所づくりに取組む稲葉ゆり子さんは、そのつながりのなかで見えてくることを語る。日常生活でできることに、自分では気づいていないことがあるのではないか。誰かに喜んでもらえること、やさしい言葉が自信と喜びになる。肌でわかると地域への思いが育まれ、小さな達成感が重なって、成長が実感できる。自由に話し合い、やってみること、活動する人の「ワクワク感」に突き動かされて行動すること、変化を楽しむことで、いきがいが生まれるのではないか―。

「協同労働」を通じて生きる力の回復・発揮と地域づくりの輪を全国に広げる田中羊子さんは、一人ひとりが主体者となり、地域づくりにいきいきと力を発揮するために、話し合いを大切に、違いを認め合い、お互いの力を活かしあう働き方として協同労働を、そこで大切にしている価値や運営の特徴、法制化にあたっての基本原理とともに紹介する。被災地で困難のなかから人々が立ち上がる物語を共有し、一人ひとりと地域の困りごと、やってみたいをかけあわせ、地域づくりを仕事にしていくこと、「みんなのおうち」づくりを呼びかける。

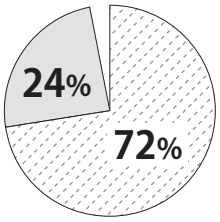
神奈川県鎌倉市に本社を置き、ゲームアプリや広告制作等を行う面白法人カヤックを創業した柳澤大輔さんは、事業も人事制度も組織も屋号に掲げる「面白」を根っこに展開。ブレストから仲間を募りプロジェクトを推進、楽しみながらまちの活性化に取組む「カマコン」からまちづくりへ、その全国への広がりから移住スカウトサービスへ、従来の経済資本に加えて環境資本や社会資本を含む３つの資本の増大を通じて個人の幸福と持続的な成長を目指し、デジタルとゲームの要素を活かして「まちのコイン」でこれを可視化・促進する。

社会教育を専門として全国各地でまちづくりの実践や共同調査に携わる東京大学の牧野篤さんは、自然状態から社会をつくりだす過程の考察をめぐるルソーとホッブズの違いから口火を切り、多様性を基本とする小さな社会における自己への駆動力へと話を進め、日常生活の具体的な言葉で語りあい、対話を重ね、試みることと変化を楽しむかかわり、そこに生まれる試行錯誤の開放系のＡＡＲ循環に着目する。つながりのなかでの新たな発見と驚き、うれしさと楽しさ・愉しさこそ人間開花社会を駆動するのではないか。

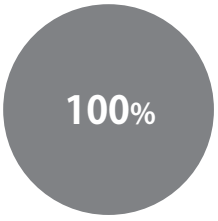
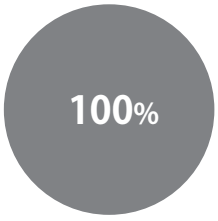
アイデアを出し合い、話し合い、ともに試みることを通じて互いに認め合い、自己決定ができる社会に向けて、労働者協同組合のような仕組みも使い、楽しみ・喜び、面白がることができる場と機会を増やすことがカギとなると総括した。

アンケートの結果　参加者概数：240名　回答者数：116名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方